

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】寺崎陽子

【所属】(助成決定時)一橋大学大学院 社会学研究科

【研究題目】自然の移植－アメリカ国立公園制度とタイの自然－

【研究の目的】

本研究の目的は、「自然」をめぐる価値の生成と変容について、国立公園制度の形成プロセスと管理運営における言説と実践から明らかにし、文化と制度がどのような相互作用のなかにあるのか、その構造的問題を議論することにある。いまや国立公園の発明家として名を馳せるアメリカの国立公園制度は、自然保護、リクリエーション、文明、公的空間、民主主義といったアメリカの概念やイデオロギーを内包した自然保護政策の「パッケージ」となり、各国に「移植」されている。アメリカの文化を具現化した国立公園制度は、他国の、とりわけ非西洋諸国の自然思想や営み、文化的価値にどのような影響を与えているのか。本研究はタイ国におけるアメリカ型国立公園制度の導入に着目し、アメリカの国立公園制度がどのようにして自然をめぐる多様な価値を内包したまま国境を超えていったのかを追う。そして、近代社会における組織の高度な制度化と価値の生成がどのような相互作用のなかであり、自然保護政策のグローバル化を促しているのかを考察する。

【研究の内容・方法】

本研究に向けて2つのフィールド調査を計画してきた。ひとつは2006年9月～2007年3月にかけて、アメリカ合衆国で行なってきたものである。約8ヶ月間、アメリカ国立公園局国際部があるワシントンD.C.と、サンフランシスコ周辺の自然公園を拠点に、国立公園が国立公園局によってどのように管理され、そして他国に紹介されているのかを調査した。そこではまさに「パッケージ」という言葉通りに、あらゆることがマニュアル化され、局員たちによって「習得」されていた。そして、それらは惜しみなく来訪する他国の政府・NGO職員、研究者たちに伝授されていた。ここでの調査を踏まえ、今年の2月から3ヶ月間タイでフィールド調査を行なった。タイではアメリカの国立公園制度をモデルに、1960年代頃から国立公園の設置がはじまり、すでにその数は100を越えている。なぜ、ここまで大きな制度に成長したのか。国立公園制度はアメリカがつくりあげた独自のものであり、異なる自然観やコスモロジー、文化、歴史、そして自然条件をもつ地域で実践するのは困難だという批判が後を絶たない。とりわけ「ウィルダネス」の保護を重視する手法は、人間と自然の間に境界をひき、先住民を強制移住させたり、彼らの伝統的農業を禁止させたりして人々の生活を奪うといった批判がなされてきたが、タイでもこういった社会問題は起きている。本研究ではNational Park, Wildlife and Plant Conservation Departmentの職員たちの実践を中心に、彼らがどのようにして高度に制度化されたアメリカ国立公園制度の「パッケージ」を受け入れ／受け入れなかったのかを調査した。国立公園制度をとりまく両国の政府職員らの言説と実践から、国際社会における自然保護の文化的問題を指摘し、また制度と価値生成の相互作用を明らかにすることで構造的問題を議論したいと考えている。

【結論・考察】

カオヤイ国立公園などタイを代表する国立公園ではビジターセンター、標識、パンフレット、お土産に至るまでアメリカ国立公園を連想させる物が多い。ある職員は「コピーした」と話していたが、入手できた資料からもアメリカの「マニュアル」がタイに強い影響を与えていることは明らかであった。アメリカにおける国立公園政策の高度な制度化が、タイの国立公園制度導入を容易にしてきたとすれば、問題は容易にさせるメカニズムである。タイの自然観は森林僧やアミニズム的語りから議論されることが多いが、しかしそういった語りは、例えば比較的観光客の少ないクイブリ国立公園で象の調査に同行したときほとんど見受けられなかった。国立公園制度の導入によってレンジャーの自然観はどのように変容した／してないのか。今回の調査で明らかとなった彼らの言説と実践から、自然をめぐる制度と価値の理論的研究を深め、グローバル化時代の自然保護運動の文化的問題について考えいきたい。